（公社）中央畜産会創立70周年記念行事
森山裕会長 記念講演会を開催

（公社）中央畜産会は10月２日、東京都千代田区の都市センターホテルで創立70周年記念行事として、森山裕会長の記念講演会を開催し、約400人の関係者が出席した。テーマは「地域を守り農を励ます～次世代のために果たすべき役割～」。

衆議院での永年在職表彰（在職25年）の際に謝辞を述べた映像が上映された後、森山会長が登壇。「政の大体は、文を興し、武を振ひ、農を励ますの三つに在り」という西郷隆盛の教えを紹介し、「農を励ます国家にすることが、食料安全保障の確保にもつながる」と強調した（記念講演の内容は次ページで紹介する）。

講演後には、（公社）佐賀県畜産協会の金原壽秀会長と（公社）日本食肉格付協会の大野高志会長から、それぞれ講演への感想や森山会長への感謝の言葉が述べられた。閉会のあいさつでは、中央畜産会副会長の姫田尚が熊本地震復興支援への協力を呼びかけるとともに、来場者に謝辞を述べた。なお、会場では熊本地震復興支援の一環として、来場者に熊本県産のLL牛乳が配布された。

（奥西　真理子）


中央畜産会 会長
森山（もりやま） 裕（ひろし） 氏


佐賀県畜産協会
会長
金原（かねはら） 壽秀（としひで） 氏


日本食肉格付協会
会長
大野（おおの） 高志（たかし） 氏


中央畜産会
副会長
姫田（ひめだ） 尚（たかし） 氏



皆さまの御協力をいただき、中央畜産会は70年の歴史を重ねることができました。これから100年、200年とわが国の畜産の発展のために、中央畜産会が果たすべき役割は大きいと思いながら、会長職を務めさせていただいています。

私は昭和20年４月８日、鹿児島が大空襲を受けた日に、貧農の長男として防空壕の中で生まれました。畜産との最初のつながりは、家で豚を飼っていたことです。近所の焼酎製造工場からまだ温かい焼酎かすをバケツ２杯もらってから学校に行くのが日課でした。

今でも忘れられないのは、母が大事に育てた豚を集荷するために家畜商の方が来られた時のことです。豚を出荷するときには、母はいつも涙を流していました。それだけ、豚との別れは非常につらかったのだと思います。私は、こうした人と家畜との関係こそが畜産の大事なことではないかと思います。こうした経験も踏まえ、これからの日本の畜産の発展を考えるとき、まず立ち止まってわれわれが気づいていないけれど、日本ならではの優れた取組みがいくつもあることを忘れてはなりません。

昨年８月、ジョージ・グラス駐日米国大使が鹿児島に来られたとき、「長崎から鹿児島までの移動中、牧場を１ヵ所も見ることができなかった」と言われました。大使の祖父は大きな牧場主だったそうですが、私が日本の和牛はハウスの中で育てられていること、また、これから食べていただく和牛肉の生産者が誰であるか、血統もおじいさん、おばあさんまで遡って分かると話すと、とても驚いていました。

日本は、先輩方の大変なご努力と関係団体の皆さまのご尽力によって、世界に誇れる和牛の登録制度をつくり上げてきました。大変意義ある制度であり、その基礎があるからこそ改良も進めることができます。こうした制度を守り抜いていくことが大事です。

一方で、反省しなければならないこともあります。二度と起こしてはならない口蹄疫やBSEという家畜疾病が、過去に発生しました。この両方の発生時に国会議員として在職し、今でも現役を務めているのは、私一人になりました。

口蹄疫やBSEがどのような経緯で発生したのか、もう一度われわれは振り返らなければなりません。平成22年に宮崎県で発生した口蹄疫では約30万頭の家畜を処分せざるを得ないという非常に厳しい状況に直面しました。10年ひと昔と言いますが、大事なのは、畜産農家の皆さまと一緒になって監視体制をつくり、現場の情報が的確に入ってくる仕組みを構築することではないでしょうか。現場の皆さまが一番よく分かっているのですから、その情報を中央畜産会がしっかり受け止める仕組みをつくることが大切だと思っています。

また、平成３年の牛肉の輸入自由化問題では、自由化の流れを止めることができない中で、肉用子牛生産安定等特別措置法により、牛肉関税をしっかり畜産振興に使うという特定財源化の道をつくっていただきました。今年の牛肉関税の見込み額は970億円ですが、肉用子牛生産者補給金などに使われる仕組みもつくられました。

今後、中央畜産会が目指すべきことは、畜産の発展に関わる幅広い業務を、畜産農家の皆さまに信頼していただけるよう着実に実施していくことです。県の畜産会ともさらに連携を密にし、経営指導を核として、畜産に貢献する中央畜産会でなければならないと感じています。

そして、これからは個々の経営能力を高めることが非常に大切です。今、畜産の世界でも女性が大変活躍するようになっています。女性が経営に参画することで経営がより良くなるということも、数字から分かります。

第11回宮城県全国和牛能力共進会（全共）と第12回鹿児島県全共の種牛の部では、鹿児島県がチャンピオンになりました。その牛は、鹿児島市郊外の一頭飼いの農家で誕生したことが分かり、生産者にお話を伺いました。当時83歳の女性で、ご主人が元気な頃は５、６頭飼っておられたそうですが、ご主人が亡くなってからは１頭だけにしたそうです。「なぜ、日本一になるような牛を生産できたのですか」と聞くと、「主人から、牛は撫でてやる回数に比例して良い牛になるのだと教えられたので、そのことだけやってきました。毎日毎日、愛情をもってブラシをかけてきました」と言われました。やはり牛の世界では、どう愛情を伝えるかということも本当に大事なのだと思います。また、もう一人の方も女性の方でした。ご主人を亡くして飼養頭数を減らしているそうですが、役場に勤めていた長女のご主人に早く仕事を辞めてもらい、今、牛飼いの教育をしている最中ということでした。このように、女性に積極的に参加していただける仕組みを、今後つくっていかなければなりません。

私は鹿児島の生まれですから、西郷隆盛翁の教えについて、いろいろ考えさせられることがあります。西郷南洲翁は、「政（まつりごと）の大体は、文を興し、武を振ひ、農を励ますことにある」と説きました。農を励ます国家にすることが、食料安全保障の確保にもつながると思います。

それともう一つ、私が世界に誇れると思うのは、家族経営を中心にやってきた日本の農業です。昔から、農家の長男は農業を継ぐという伝統らしきものがありました。日本では、経営者と農業に従事する人が一緒です。これは、日本の農業の大きな特徴だと思います。

ところが、海外では農業経営者と従事者は分かれている場合も多く、日本の農家の皆さまは、経営と現場の両方を担っているからこそ、技術や経営能力が高いのではないかと思っております。

どうか今後とも、日本の畜産振興のために、それぞれのお立場でお力を発揮していただけますようお願いいたします。また、中央畜産会としても関係団体としっかり連携し、畜産の中心としての役割を果たせるよう、役職員の皆さまと一緒になって、私も微力を尽くしてまいりたいと考えております。ご清聴いただき、ありがとうございました。